

なんでボクは家を設計くるんだろう

明月社のいえづくり

光陰矢の如し。「ん？おかしいんちゃう。光のほうが矢よりも早いやろ。」「いやいや、光陰ちゅうのは月日のことやで」などとどうでもいいことを考えているうちに、光陰は過ぎ去る。ボクが明月社を始めてから、もう10年以上が過ぎ去ってしまった。そのころ彰国社から出版した「家を建てる。」の内容にも、いろいろと足したり引いたりする必要がでてきたようだし、多くの家を設計させてもらう中で気が付いたこともたくさんある。世の中の技術や製品の進化もあるし、木の家のおおもとである日本の林業の変化もある。

てなことで、久しぶりに家づくりについてまとめて書いてみようと思ひ立った。

■ 建築っておもしろそうやな

ボクは30歳の直前まで病院で事務職をしていた。受付のお兄さんだった。地域医療に力をいれた病院でそれなりにやりがいもあったんだけど、生来ボクは「人に命じられて何かをする」ということが苦手。医師という絶対的

存在のある病院での仕事には向いていないなあ　とも感じていた。

「もう30かあ。方向転換するなら今やなあ。」なんて言いながら漠然と色んな職業を想像していたある日、とある建築家の書いた本を読んで「こんな仕事おもしろそうやなあ」と思ったのが、建築を始めるきっかけだった。いたって単純。たいした志もなく、なんとなく面白そうで建築を始めてしまった。

30歳になる年の春に惜しまれつつ（ってことにしておこう）病院を退職し、昼はゼネコンに勤めながら夜は建築の学校に通った。大阪工業大学短期大学部建築学科　という長い名前。夜間のみで2級建築士の受験資格がとれるというので即決。社会人入試で滑り込み、ついでに特待生もゲットして授業料もおまけしてもらった。（ちなみにこの短期大学部は10年くらい前に無くなってしまった。母校がなくなるってのは寂しいもんだね。）

ここで出会った先生の影響は大きかった。とくに主任のK先生は講師控室でビールをちびちびやりながら製図指導するというツワモノで、夜9時に講義が終わると「おい行くぞ」と学校の隣の居酒屋に連れて行かれるという毎日。終電の時間まで建築の話やクラシック音楽の話をや々と聞かされた。K先生は不思議なことにほとんど一方的に自分が話し続けているのに、ボクがなにか悩んでいると、バツハとペーペーの合間に、脈絡なくアドバイスが挟まっ

ていたりする。超能力？と思ったりしつつ、濃密な夜間学校の時間は過ぎていった。

夜間の短大なので卒論はなかったが、一応卒業設計はあり、ボクは銭湯とギャラリーの複合施設を描いた。当時住んでいたの大阪から二駅の桜宮で、北側には大病院や超高層マンションなどが並ぶ表通り、南側にはラブホテルが林立するデュープ桜宮。その間に大きな空地があった。ここに何か建てるとしたら・・・そう発想してみた。街の新旧が無理なく交差する場。土地に込められた歴史や想いを壊さない開発。そんなことを考えながら稚拙な図面や模型を作成した。そして、その考えは今でもボクの中にある。

場所の持っている力、存在する流れ、ハッキリ目に見える要素とそうでないもの。それを感覚的に読み取るのが、建築家の最初の仕事だ。住み手が何を望むかとか、建築家が何を表現したいかなんていう話の前に、その場所を読み取るということ。逆に言うと、ボクは場所を特定しない建物の設計はできない。実際に建たないものでも、実際の場所を想定しないと、なくんにもアイデアが浮かばない。ちと気取って言うなら、流れ、軸、地域の空気、そうした要素と住み手の暮らし方をどうあわせるか、そこに設計の醍醐味がある。今あるものをどれだけ活かすかという、実はすごく保守的な仕事だ。

場所を知ったら、次は住み手（≡施主さん）の話聞く。

でも、住み手の暮らし方はいくら聞き取りをしてもなかなか分からない。自己表現の得意な施主であれば、ある程度伝わるけれど、多くの場合はジツと聞いていると「4LDKで、収納はたくさん」みたいな話になってしまふ。そんなときボクは、こちらから質問をすることになっている。「料理は好きですか」「晩ご飯のあとはどうされていますか」「テレビはよく見ますか」「家族の趣味はなんですか」「休みの日は何をしていますか」「新しい家になったらやってみたいことは」などなど、ストーリーっぽいインタビューが続くことになる。

これから家を建てる人に勧めたいのは、家族の生活パターンを紙に書いて把握すること。それをどう改善したいのか話し合っておくこと。家の形や色なんかより、ずっとずっと大事なことだ。場所の特性と、家族の暮らし方。それが建築家に伝われば、実は仕事は半分終わったようなもの。そこから先は、建築家の技量次第。ダメな建築家はいくらひねってもダメだし、マトモな建築家であればマトモな答えが自ずと出てくる。ダメっていうもの二通りあって、本当に能力が無いダメと、相性が悪いダメ。どちらも避けて通らないと、後で泣きを見ることになる。

だから、建築家が提示するファーストプランが大事。ファーストプランというのは最初の現地調査と聞き取りを持ち帰って、次回に建築家が持つてくる図面。これを見て、細かいことはともかく「ああいいな」と感じるのか、「な

んだかなあ」と感じるのか。「詳しい理由は分からないけど、なんだかなあ」と感じたらやめておいた方がいい。直感はずれだから。

ただ注意したいのは、あまりにリアルなCGや華美に飾り立てたプレゼンは、大事なことが伝わらない、てこと。紙面のウワツラに目を奪われて、建築家の意図が伝わらない。建築家もそういう目くらましに頼るべきではないし、住み手も欺されないように注意したい。ボクはシンプルな平面プランと、必要ならば簡単な立体CGか模型を提示するようにしている。それで相性を判断してもらい、「合わないと思ったら遠慮なく断って下さい。このまま進めよう」という気持ちになってももらえるなら、設計契約をお願いします。」と言う。どんなに見た目がよくても、「伝わらない」感覚をもったまま中途半端に進めるのはお互いにとって不幸なことだから、ここは大事なところだ。

なんで「伝わる」とか「なんだかなあ」みたいないい加減なもので判断できるのかというと、その前の段階で「場所の特性」と「家族の暮らし方」の話をしているから。そこで住み手がしっかり話をできていると、返ってきた答え（ファーストプラン）を見た時に善し悪しを感じる事ができるわけ。逆に言うとなんか4LDKで、収納はたくさんみたいな要望しか出していないと、返ってきた答えを見ても表面的なキレイさしか目に映らない。危ない危ない。

さて、ファーストプランを見て前に進めよう、という話になれば、そこから本格的に設計作業に入ることになる。プランを示しながら、あーだこーだと引き続き聞き取りを進める。最初のインタビュアーでは出てこなかった話が、「これじゃああれができない」とか「この間取りだとこれをすると不便」とかどんどん出てくる。そういう話が出切ってしまうまで何回も繰り返し返す。聞いて描いて聞いて描いて、平均するとプランはだいたい5回くらい提示しているかな。だいたい3ヶ月かけてこの作業、すなわち基本設計をやる。基本設計で、間取り、立体的な家の形、主な使用材料なんかを決めてしまうので、どんな家になるかはほぼこの段階で決まってしまう。住み手にとってはいちばん重要な段階だ。

基本設計がOKでことになると、そこからは実施設計という詳細図面の作成に入る。主に、工務店が詳しい見積もりをしたり、実際の工事の手配をしたりするための図面だ。有名建築家の図面などを見学すると、微に入り細に入り、ここまで描くかという詳しい図面を描く人も多い。柱の断面に年輪まで描いてあってびっくりしたこともある。たしかに、図面を見ただけで圧倒されるのだが、実際に見積もりと施工にそこまでの図面が必要かというと、必要ではない。ではなぜ彼らはあれほど精緻な図面を描くのか。白井晟一という戦中戦後にかけて活躍した巨匠は、6日の鉛筆を鋭くとがらせて細かい細かい図面を描いていたそう

だ。慣れない弟子が線を引くとスーと紙が切れてはじめてから書き直しなんてこともあったそうだ。なぜそんなことをするのかと弟子が問うたところ、「工務店に言うことをきかせるため」という旨の答えがあったとか。

なるほど、戦後に雨後の竹の子のように現れた自称工務店は、玉石混淆と言うよりも、石の中にわずかに玉があるような状態で、そんなダイクならぬダイハチやダイシチを抱えていた工務店は、それ自体が芸術品のような図面を見ただけで逃げ出したことだろう。設計者の本気を受け止める気概のある工務店でなければ、取り組もうという気にすらならない。それが、精緻極まる図面の効能なのだろう。

しかし、最近の住宅の施工は、戦中戦後の時期とは大きく異なる。工法も部材も法律もかなりの程度まで成熟しているから、素材をいちから作るということはほとんどなくて、選択と組み合わせで出来上がってしまう。頑なにそうした既製品を拒否する人もいるけど、ボクは成熟した技術は採用すべきだと思っている。そのことで、コストパフォーマンスは何倍にもなるのだから。

正確な選択と組み合わせをするためには、名人芸は必要なくて。まじめで正直で理解力があれば十分だ。だからボクは、図面には余計なことは描かない。正確な選択を伝えるためには、柱の断面の木目模様は、ジャマになることはあっても理解を助けることにはならないからだ。その代わり、細かい図面がないと理解できない例外部分は、部分的

に詳しい図面を描いて検討する。コンピュータの中では原寸（本物と同じ大きさ）で検討している。

つつい図面の話が長くなってしまった。こうやって、工務店に設計内容を正確に伝えるのが実施設計だ。スイッチ、コンセント、照明器具の位置決めや、構造計算もこの段階に入る。実施設計の段階は、期間にして2ヶ月程度。主な打合せは、2〜3回ということになる。これが終わると、住み手と設計者で図面の最終確認をおこない、その図面を工務店に渡し、見積もりに入る。

工務店の決め方については、話し始めると一晩かかるので、また改めてということにして、話を前に進めよう。いろんな事情で設計段階から依頼する工務店が決まっている場合は、基本設計が終了した段階で概算見積もりを出しておくことが多い。基本設計の図面では詳しい見積もりはできないので、だいたい100万円単位くらいのおおざっぱな金額の見当をつけておく。予算から大きく外れていないということを確認して進められるので、安心できる。ただし工務店によって金額は1割も2割も違うことがあるので、少し幅を見ておく必要があるけれど。

概算見積もりがほぼ予算におさまりそうだと分かった段階で、建築確認申請を提出する。建築基準法で決められているから、これを出して確認が降りてからでないとして着工できない。木造2階建てであれば提出から1週間以内に確認

が降りることになってきているのだけれど、実際は自治体への届け出や消防署への経由などがあり、3週間程度かかると思っておいたほうがいい。

条件が合うときは「長期優良住宅」の申請も同時にすることになる。年ごとに制度が変わるので約束の限りではないが、運がよければ100万円程度の助成金がもらえることもあるし、税金の優遇なんかもあるので、できるだけ長期優良住宅の取得はお勧めしたい。

20万円ちよつとの申請費用はかかるけど、長い目で見ればお得。

長期優良住宅についてもちよつと書いておこう。制度ができるきっかけは、福田政権の時の「200年住宅ビジョン」だった。そのご200年という具体的な数字は引っ込めて、長期優良という曖昧な制度になった。普通のコンクリートや接着剤を使って200年とは大ボラが過ぎる話なので、さすがに国交省も遠慮したのだろう。それでも建築基準法ギリギリで作っている住宅に比べると、耐震性、耐久性、断熱性はあきらかにレベルアップすることになるし、運が良ければ補助金も出るの、やっておいて損はない。明月社の家の場合、長期優良住宅の認定をとつてもとらなくてもだいたいそのレベルの性能は確保しているので、補助金をもらえれば丸儲けということになる。

工務店の見積もりの話に戻ろう。一回目の見積もりで「〇

K！」になることは、まずない。だいたい最初は少々予算オーバーするのが世の常で、工法や材料を見直したり、工務店が仕入れを検討したり、要求自体を少しだけあきらめたり、そんなことをしながら予算内におさめていく。設計段階で「そんなに希望を爆発させたら絶対に予算オーバーしますよ」といくら説得しても、ほとんどの住み手の方はブレーキがきかなくなる。まあこれは仕方のないこと。それほど家づくりは楽しいのだから。でも、「予算オーバーしたらこれとこれは諦めよう」という腹づもりだけはおいてもらわないと、見積もり段階で気分は天国から地獄へ転落することになる。絶対に譲れない部分と、これはオプシオンと割り切る部分を意識できているかどうか、幸せな家づくりができるかどうかの分かれ道だ。そんなこんなで見積も結構忙しくて、見積もり期間だけで1ヶ月くらいは見ておいた方がいい。

ここまでをふりかえると、場所を読むことから始めて、基本設計、実施設計、申請関係、見積もり、という工事が始まる前の段階で、半年以上の時間が過ぎていく。言葉で聞くと長いようだけれども、実際にやってみると住み手もなかなか忙しくて、あつという間の6ヶ月という感想を持つ人が多い。打合せだけでなく、ショールームで水回りや窓などを選んだり、タイミングが合えば完成見学会に参加したり、建て替えの場合は引越しの準備もある。普段か

ら多忙な人には、時間をかいくぐるような忙しさになるかもしれないけど、この段階で不完全燃焼だと建てた後から後悔が湧いてくるかもしれないので、なんとか時間を確保してじっくりと取り組むことをお勧めする。

■最初に教わったこと

30歳を過ぎてから建築の短大を卒業したボクは、学校の紹介で小さな設計事務所に就職した。そして、入社したその月にいきなり「チハイ」というものを経験することになった。チハイは遅配。要するに給料が出なかったのだ。それまで働いてきた病院やゼネコンでは給料日になると自動的に給料はきちんと振り込まれてたから、そのことに疑いなど持っていなかったボクは、「給料ちよつと待ってくれ」と言われて目が点になった。しかも社長の行動を見ると、どうやら誰かから逃げ回っているらしく、社長室のブラインドはいつも閉めっぱなしで、隙間から道路を覗いている。なんだかテレビドラマの中みたいだとドキドキしたが、他の所員は慣れているらしく平然としている。遅配と言われても「またか」てなものである。

そんな状態だからそもそも仕事がない。10年遅れで建築を始めたボクは、とにかくこき使ってほしかったのに、来る日も来る日も仕事がない。なんでこんな状態で求人したのか今でも不思議だが、とにかく仕事がなくて、古株の

所員などはベランダで花の栽培に精を出していた。この事務所で憶えたことといたたら、今では歴史の遺物と成り立ってた青焼きの使い方とか第二原図の修正の仕方とか。

そんな状態で半年が過ぎ、焦りに焦ったボクは短大の先生に泣きついて別の事務所に移ることにした。ここでは、大学の校舎や学生寮など、初心者にしてはハードルの高い仕事をさせてもらった。一番基本的なスキルは、だいたいこの所長に教えてもらったと思う。中でも、繰り返し言われたのは「建物は動くんだ」ということ。鉄筋コンクリートの建物でも、少し風が吹けば動き、もちろん地震があれば動き、経年変化でも動く。それを見越して作らなくてはいけない。これは、初心者には目から鱗だった。さらに強調されたのは、「水仕舞い」。雨水をここで止める、という明確なラインを作れ、ということ。当たり前のようについて聞かえるかもしれないけれども、これがアイマイになっているケースは実に多い。何年も後になって現場の実務をたぐさん見るようになってから、その時の「水仕舞い」の教えの意味がよく理解できた。建物の耐久性での、華やかなデザインとは無縁のこうしたジミな設計のスキルで支えられている。

住宅の性能の中でも「耐久性」はとかく後回しにされがちだ。耐震性、断熱（省エネ）性、デザイン、自然素材、価格 こうした話は営業トークにもてんこ盛りだし、どこ

の住宅会社のホームページを見ても「どんなもんだい」とばかりに書き連ねてある。そんな言葉の洪水の中で、「耐久性」は埋もれている感がある。2000年住宅ビジョンがコソツと表舞台から引っ込んで以来、「耐久性」は住宅性能の主役の座を明け渡してしまった。裏を返せば、普通にちゃんと作ってあれば、どの住宅も「耐久性」は大差ないということでもあったりする。

なぜかと言うと、現在主流になっている木造住宅の工法なら、「耐久性」に最も影響大なのがコンクリートと接着剤の寿命だからだ。基礎を作っているコンクリートと柱や梁などの主要な構造部材になっている集成材を貼り合わせている接着剤。この二つのうち短い方の寿命が、すなわちその住宅の寿命であるといえる。他の部分がいくら長持ちしたり補修できたりしても、基礎と構造体を丸ごと補修するのは建て直すより費用がかかるほど困難なので、現実的には基礎コンクリートか構造用集成材の寿命が家の寿命であると考える間違いじゃない。

では、長期優良住宅を含めて今建てられている住宅の基礎コンクリートは、どれくらい寿命なんだろう。コンクリートの寿命はほぼ強度に比例すると言われていて、JASSという国の基準を見るとFc18↓30年 Fc24↓65年などと書いてある。一般に住宅の基礎に使われるのはFc21というコンクリートなので、ちょうど上記の中間ということになり、設計上の耐久性は47.5年とい

うことになる。あれ？意外と短いぞ。

2000年住宅などという大ボラがコソツと消えた理由の一つがここにある。ほとんどの場合Fc21のコンクリートも測定すると25以上の強度になっているので、50年よりは長くもつと思われるが、それにしても設計上は50年のものを200年と銘打つわけにはいかないだろう。

明月社の標準仕様では、基礎のコンクリートは一般より一つ上のFc24を使っている。これならば設計上で65年、実質100年くらいは心配ないことになる。それと、Fc21だろうが24だろうが、コンクリートの施工が悪くて隙間だらけでは耐久性はがた落ちなので、基礎屋さんが手抜きをせずにミッチリ詰まったコンクリートを打設してもらおうようにすることも重要だ。だからボクは、基礎工事の間はちよつとイヤミだけど2回は現場のチェックに出かけて、現場監督にも基礎屋さんにも緊張感を持って工事してもらおうように注意している。

コンクリートと同じくらい構造体そのものに関わるのが集成材だ。集成材というのはカマポコ板くらいの木材を接着剤で貼り合わせて、柱や梁のような大きな材木にしたもの。欠点を省いて状態の安定した構造材であり、ほとんどの木造住宅メーカーがこの集成材で家を建てている。そして、言うまでもないが集成材の寿命は接着剤の寿命である。接着剤が寿命を迎えると、集成材の家はカマポコ板に戻っ

てしまい、原型をとどめないほどにバラバラになってしま
う。かなり怖い。まあ、実際は一齐にバラバラになるので
はなく、一番力がかかっている箇所や劣化の激しい箇所が、
バキッとはがれることになるだろう。それでも怖い。

ほとんどの木造住宅が集成材で建てられている以上、当
然ながら集成材の耐久性は明示されているはずだ。と思っ
て探してみるが、実はそのようなものはない。長寿命系の
接着剤についてはある程度データも出ているが、住宅の集
成材で一般的なイソシアネート系接着剤の寿命については、
なんと、誰も保証も断言もしていない。イソシアネート系
接着剤はシックハウスの心配がないことから最近の主流に
なっているが、実は湿気に弱く耐久性は他の接着剤に劣る
うえに、これまでの実績も25年ほどしかないというのに。

もちろん、だからといってイソシアネート系の集成材が
25年でバラバラになる、と予言することはできない。東
日本大震災や熊本地震の被害報告でも、集成材の剥離は問
題になっていないので、現時点で社会問題化するほどの剥
離事件はおきておらず、集成材は危ないぞと言ってしま
うのは間違いだ。ただハッキリ言えることは、集成材の寿命
は「分からない」ということだ。

寿命の分からないものを、たぶん大丈夫だと言って住み
手に勧めるのは嫌なので、ボクは原則として製材品を使う。
製材というのは、丸太を四角にカットしただけの材料。も
ちろん製材品には製材品の欠点があるので、それを補うた

めのノウハウもあるのだが、それはまた別のところ。と
にかく、耐久性に関しては、杉や桧の製材品は千年の実績
がある。

千年もつ杉や桧といえども、雨漏りしてはひとたまりも
ない。かの設計事務所が教わった「水仕舞い」である。た
だ、設計事務所です習ったのは鉄筋コンクリートなどの話だ
が、木造住宅の実務を長年やってきて分かったことは、木
造の水仕舞いの考え方は少し違うということだ。鉄筋コン
クリートなどでは、「ここから先は水は一滴も入れない」
という絶対の防水ラインが1本あるのに対し、木造の場合
は太いラインが1本と細いラインが2本くらいの多重構造
になっている。例えば屋根を見ると、屋根材で99%の雨
を防ぎ、その下の防水シートで残りの0.9%を防いで、
それでも侵入する0.1%は乾燥させる。みたいな考え方
になっている。外壁も同じ。なぜそんなに加減なことにな
っているのかと言うと、鉄壁の守りが崩れた時を想定し
ているからだろうと思われる。

鉄筋コンクリートでも建物は「動く」。まして木造はか
なり動くので、何かの拍子に隙間ができて水が浸入するこ
とがないとは言えない。しかも、浸水した時にはコンクリ
ートよりも当然ながら被害は大きい。その不利な条件を克
服するために、1本の防衛ラインではなく、0.1x0.1
x0.1のように限りなくゼロに近づけておいて、残った

0・001はいったん木にしみこませてから乾燥させようという、一見ゆるいシステムになっている。ちなみに、乾燥させるのは雨水だけじゃなくて例えば釘に着く結露などもあるのだ、どっちみち必要なこともある。

こんな話を聞くと、やはり木造住宅は安心できない、と早合点する人もいるかもしれない。でも安心していただきたい。長い期間で考えた時、最初から万が一を想定した多重システムのほうが、強固な単一のシステムよりも、ずっと安定しているからだ。これは、防水だけの話ではなく、防火性や耐震強度などでも同じことが言える。木造は、多くの点で性能が劣っているように見える。しかし、単品で劣っているからこそ、始めから多重防衛を組んであり、家というシステムとしてはかえって安心できるようになっている。

もちろん、手抜きや無知による間違いがあったら元も子もないので、設計も施工も木造住宅というシステムを熟知していることが求められる。とくに雨漏りは木材の天敵であることは間違いない。建物が揺れた時、横殴りの強風の時、毛細管現象、様々な状況を想定した防水の原則を守るようにしたい。

耐久性のあるコンクリート基礎を作り、集成材ではない木材を使い、雨漏りを防げば、耐久性のある家はできるのだろうか。実は、まだ大事な要素が二つある。どちらも最

近の家ではリスクは減っているものの、まだまだ無視することはできない。

その一つ目は、シロアリだ。土台や柱をスカスカになるまで食べてしまうシロアリ。漢字で書くと白蟻なので、この被害のことを蟻害（ぎがい）と言ったりする。もともと、白蟻は蟻の仲間ではなく、ゴキブリに近い。家を食べてしまふことから、なにかモンスターのなイメージがあるけれども、一匹一匹はとても弱い生き物だ。知能も低くほとんど学習能力がないと言われている。とにかく目の前にあるものをカジる。知能がそこそこ高い生物は毒を食って仲間が死んでいたら「危ない」と思っただけで逃げていくが、シロアリはお構いなしにカジるので、一番の防衛策は点検である。少なくとも数年に1回は、床下と家の外周を点検した方がよい。とくに最近の家の場合は外回りのほうがリスクが高いといえる。

昔は床下は土のままだったので、シロアリの通行は自由だったが、最近ではほぼ例外なくベタ基礎と言って、15センチくらいの厚さのコンクリートが敷き詰められている。縦横に鉄筋が入っているので大きな亀裂もできにくい。これを貫通して出入りするのにはシロアリといえどもかなり苦労する。というか、何らかの隙間がないとまず不可能だ。配水管などがこのコンクリートを貫通していると、管とコンクリートの隙間ができるので、こういう箇所を無くすことが重要になる。どうしてもできてしまう時は、念入りに

モルタルなどでふさぐ必要がある。

家の外回りは土に接しているもので、シロアリは当然ここから伝って上がるとするのだが、家の外回りは風が吹いたり日が照ったりする。シロアリは乾燥するとイチコロで、風や日光には至って弱いので、普通は基礎の外側を伝い登ることはあまりない。しかし、長年住んでいる家の周りは、エアコンの室外機やプランターが置かれ、物が積み上がり、スチールの物置が置かれるようになる。シメシメである。影になった隙間を、シロアリはやすやすと這い上がり、土台へと喰い進んでいく。そんなわけで、本気で点検する時は、家の周りに置いてある物をどけてみるのが肝心なのである。

蟻害を最小限に食い止めるためには、土台に毒を塗っておきたいのは山々だ。しかし明月社の家では、数年前までは防蟻剤という薬剤は使わなかった。防蟻剤が農薬であり揮発性だということが最大の問題点だった。防蟻剤の人間への毒性と、シロアリ被害とを天秤にかけて、使わない方がいいと判断した。防蟻剤だけでは完全には防げないこと、保証も5年しかないこと、今は安全と言われていてもいつ「危険でした」と法律が変わるか分からないこと（実際にそういうことがあった）、などから防蟻剤は使わずに点検をまめにしてもらうように住む人をお願いしてきた。

ところが5年ほど前からホウ酸系の防蟻剤が公式に認定されるようになり、昨年には保証がつかないかわりに安価

な製品も登場したので明月社でもこれを使うことにした。

ホウ酸は揮発性がないので、直接口に入れない限りは人間への害はなく、効き目も5年どころか半永久的だ。劣化しやすい建材部品については初期の保証は大事だが、ホウ酸系防蟻剤は経年劣化がほとんどない。しかも5年間の保証など家の寿命から考えるとあまり意味がないので、保証よりはコストを優先している。考え方としては従来通り点検を第一にして、補助的にホウ酸系防蟻剤、ということ。

先ほども書いたとおりシロアリは乾燥に弱く水気を好むので、雨漏りとの相性は非常に「良い」。雨漏りして湿った木材ならば、土台どころか柱を喰い進んで2階の床下をボロボロにして、さらに屋根下まで進撃する。築150年の古民家を再生した時にボクはこれを目の当たりにして、シロアリの凄まじさを実感した。リスクが減ったからといって何十年もほったらかしにするのはヤバイ。

耐久性でもうひとつ無視できないのが内部結露だ。これも一昔前の家は、まったく対策がなされていなかったもので、知らないうちに壁の中がボロボロなんてことも珍しくはなかった。そもそも内部結露とは何か。家の中の湿気が冷たいものにぶつかって水滴になるのが結露。冷たいビールを入れたコップとか、寒い日の窓ガラスとかに水滴がつくあれ。断熱が悪いと壁の表面に結露してカビが生えるなんてこともよくある。この結露が、目に見えない壁の中にでき

てしまうのが内部結露だ。なにせ見えない場所なのでたちが悪い。

いわゆる木造モルタルの古い家のリフォームなどでは、壁をはがしてみたら見るも無惨という光景もたくさん見えてきた。10年くらい前はボクの著書をふくめて、家造り本のほとんどが内部結露に警鐘を鳴らしていた。そのお陰か、近年は内部結露のリスクは以前に比べて格段に小さくはなっている。ほとんどの家に外壁通気層が設けられるようになったからだ。サイディング壁であればほぼ100%、モルタル壁でもよほど無知な工務店でない限り通気層を作っているはずだ。各種メーカーも対応製品を開発している。

内部結露は、室内の暖かい水蒸気が内壁を透過し、断熱材を通り抜け、外気に接して冷たくなっている外壁材の裏側に到達した時におきる。昔は外壁材の内側 \parallel 壁の中だったので、カビだらけどころか土台や柱まで腐ってしまう恐怖の内部結露だった。それを防ぐために、外壁の裏側に約1.5センチほどの隙間（外壁通気層）をつくって、室内から侵入してきた水蒸気を逃がす構造になっている。まだまだ完璧ではないが、昔のようにいきなり冷たいモルタルに水蒸気がぶつかるような酷い状態ではないので、基礎コンクリート、集成材、雨漏りなどに比べると内部結露のリスクは小さくなったと評価している。

では、最近の家では室内の水蒸気はどんなルートを旅しているのだろうか。室内側の仕上げ材で多いのはビニール

クロス。これも最近では透湿性のものが増えていたので水蒸気はかなり透過する。明月社の家では内装は和紙か漆喰が多いので、無条件で水蒸気はスルーである。次にぶつかるのは石膏ボード。この材料もかなり湿気をよく通すので、すぐにその裏側 \parallel 壁の中に到達する。壁の中にあるのは断熱材で、最も多いグラスウールは綿状なので水蒸気を遮ることはないが、内側に貼ってあるポリエチレンのシートは水蒸気を通さない。断熱材の内側で冷たくないの、ここで水蒸気がせき止められれば内部結露はおこらない。しかし、実際の現場を見れば分かるのだが、目で見てもわかるほど隙間はできてしまうので、実際はかなりの量の水蒸気が通過していく。するといよいよ断熱材の外側、すなわち冷たい世界に到達する。そこにそびえ立っているのは構造用合板 \parallel ベニヤ板である。これは壁を密閉するように貼つてあるので、かならず水蒸気はベニヤ板にぶつかることになる。

ここが実はグレーゾーンだ。ベニヤ板が水蒸気を通しやすいのかどうか、結露するほど冷たいのかどうか、これは微妙なところだ。水蒸気の通しやすさ（透湿性）は、ビニールよりははるかに通すけれども、石膏ボードに比べるとかなり通しにくい。断熱材の外側だからもちろん冷たいけれど、さらにその外側に通気層と外壁材があるので少しはマシだったりする。よって、すごく寒い日に石油ストーブを焚いたりなべ物をすると結露するかもしれないが、小春

日中で大量の水蒸気を出さなければ結露しないかもしれない。厳密には専用のソフトで計算してみないと分からないほど、微妙な線なのである。

そこで、明月社の家ではベニヤ板の代わりにモイスという板材を使っている。シックハウスの心配がない上にベニヤ板の2〜3倍の水蒸気を通すので、関東から西ではほぼ内部結露のリスクはない。わずかにあつたとしても材料自体が一時的に吸収して、昼になってから乾燥すると考えられる。しかもこの材料は鉱物質なので腐ることもない。ベニヤ板よりも少し割高ではあるが、この材料を使うメリックトは大きい。モイスについてはあらためて詳しくお話しする機会があると思う。

ちなみに、ペーパーバリアといって断熱材の内側のビニールシートを、まさに水も漏らさぬように隙間なく貼ってしまう工法もある。しかし、水蒸気は水よりも粒子は小さく、水も漏らさぬよりもさらに厳密な施工が要求されるうえ、「家は動く」という原則を思い出せば、台風や地震などでいつ隙間ができるかわかったものではない。ここでも鉄壁の防衛ラインではなく、受け流す考え方のほうが長期のリスクは小さいと言える。

このあたりが、木造住宅の「好い加減」なのである。

■ 一人前になるまで

設計事務所を移ってやっと仕事をさせてもらえたボクだったが、世はバブル崩壊。建築や不動産に関わる仕事はつるべ落としの夕日のようなだった。電話帳ほどの厚みがあった求人広告誌はやがて週刊誌よりも薄っぺらくなった。勤め先の事務所もご多分に漏れず、日を追って仕事越来越少なり、ついには資料整理の日々が続くようになった。またしても焦燥に身を焦がすことになる。卒業した学校は短大だったので、一級建築士の試験を受けるためには4年間の実務経験が必要だった。卒業したのが三十二歳だから受験できるのは早くても三十六歳。それまでに十年間の遅れをできるだけ取り戻しておいて、一級の資格を取ったら一人前の顔をしてやろうと考えていた。

十年遅れて建築を始めたなどということは、お客さんや現場の職人には関係ないことだ。だれも三十過ぎのオッサンを駆け出しのペーパーだとは思わないから、あれこれ聞かれるし判断も求められる。もちろん初めて聞く話があつて盛りののだが、その場ではフンフンと分かつたような顔をしておいて、帰り道で本屋に直行し調べて帰る、てなことが日常茶飯事だった。とにかく四年間で他人の十年分くらい建築を勉強したかつたので、仕事が減っていくのは本当に辛く、いよいよ悩んだ挙げ句、またしても事務所を変わることにした。その頃にだいぶ薄くなった求人広告誌の中でわりと景気の良さそうなことを書いている事務所にした。リゾートホテルやらマンションやらの設計が引きも切

らないらしい。なんだ、バブル崩壊とか言っても仕事があるところにはあるんだ、などと呑気に考えて働き始めた。

生活が一変した。仕事は始業時間は決まっているが就業時間は無いに等しい。やり仕舞いと言えば聞こえは良いが、終わるまで終電が無くなるとうと帰れない。平均して夜11時、週に一、二回は徹夜、みたいなタイムスケジュール。与えられた仕事はポリリウム出しと言って、ある敷地にどれくらいの大きさのマンションが建つかザックリしたプランを作って面積表をつくるというもの。売りにでている土地情報にそうしたプランを添えてマンションデベロッパに提出するのだ。その中で採算に乗りそうだなとデベロッパが判断した物は仕事になる、という千三つの話。千三つというのは、千のプランを提出して仕事になるのが三くらいだから。

そんなわけで数が勝負だから、普通は三日くらいでプランを作成するのだけれど、夕方言われて翌日の昼には提出なんてこともちよくちよくあり、当然のように徹夜になる。いくらこき使ってほしいと思っても、さすがに人間の気力と体力の限界を感じ、慣れと限界が危ういバランスをとっていたころ、変わった物のプランを作れと言われた。墓地である。墓地は自治体と宗教法人しか作ることができないのだが、客はどう見ても不動産屋である。どうするのだろうかと思っていたら、京都の某寺から宗教法人ブローカーがやってきた。こんな商売もあるのだ。仏の沙汰も

金次第らしい。

さらに墓地開発は、何重どころか何十重もの法律の網をくぐり抜けなければできない。たしかその時は十三種類の法律と条令がかかっていた。その担当部局を訪ね歩いて、針の穴を探す作業を続けた。そこに現れたのは、こんどは〇〇社という筆文字の名刺をもったオジサマ。一見してそれと分かる風体。そのオジサマのBMWに乗せられて役所に行くのと、何も言わないうちからササッと奥のほうの市民の目につかない応接間に通される。役所の担当者もやけに丁寧に対応する。だからといって無理が通るわけではなかったことは役所の名誉のために付け加えておく。

何度か〇〇社のオジサマと仲良く役所を回った後、ボクは速やかにその会社に辞表を出した。これ以上続けていたら、この業界でマトモに生きていけなくなると思ったからだ。こうして過労死寸前の生活は終わりを告げた。しかし後から振り返ってみると、ここで追い込まれるようにプランを作り続けた経験は、かなり大きな財産だったと思う。その敷地に対して無理のないプランが、するするっとできるようになった。面白いプランかどうかはともかく、敷地形状や法規制などの限界と使えるプランとの兼ね合いをざっと検討つける技は、この期間に集中して身につけることができた。

住宅を設計する建築家のことを「住宅作家」と呼ぶこと

がある。ボクは、そんな自称はしないことにしている。やはり住宅は使えてナンボ、住みやすくてはわざわざ建てる意味がないからだ。住宅作家の「作品」を見ると、たしかに美しさや新規性は目を見張るものがある。彼らに依頼する住み手も、それを期待して依頼しているのだから、それはそれでいいのだと思う。しかしボクはそういう立場をとらない。住みやすさを優先するために、デザインのリズムが崩れたり、思い切りの良さがなくなったり、平庸になったりすることは多々ある。それは分かっているけれども、できるだけそうならないように努力はするけれども、でも結局は住みやすさを優先する。それは住み手の言うがままということではなく、ボク自身の判断としてそうする。逆に、「それはやめた方がいい」という時はお客さん相手でもズケズケ言う。中には気を悪くされる方もいるけれども、それがボクの役目だから言う。それは「作品」にするためではなく、住んでからのことを脳内シミュレーションするのがボクたちプロの仕事だから、プランにせよデザインにせよ言うべきことは言わせてもらう。とにかく他人に意見されるのが嫌という人は、ボクには依頼しないほうがいい。

設計というのは、詰まるところ判断の連続だ。まったくの白紙から何かを創造する芸術とはちがいで、様々な条件と方法のなかから最適解を選択する。そこには創作の要素もある。それが建築がアーキテクチャーIIアート+テクノロ

ジーと呼ばれる所以だが、こと住宅に関してはその要素は思いのほか小さい。無理にアートにされてしまつて、住んでから泣いている住み手の話は枚挙にいとまがない。

これは日本の建築家が「アート」を誤解しているせいもあるだろう。アートとはいわゆる芸術ではなく、人間の作る物と考えた方がいい。対するテクノロジー（より広義に言えばサイエンス）は神の摂理に基づくものということだ。物理法則のように人間にはどうしようもない神の作った世界がサイエンスで、人間が作り出せるものがアート。アーキテクチャーという言葉の生まれたキリスト教社会の欧米ではそういうことになっているらしいのだが、言葉だけ輸入した日本ではアートを狭義の芸術だと信じ、アーキテクトの設計した家は奇を衒つた芸術作品でなければならぬ、と思い込んでしまつたようだ。

アーキテクチャーはそのような狭い意味の芸術ではなく、神の世界と人間の世界の出会う場所だと思えば、無駄なデザインをこねくり回すこととは無関係だ。人が暮らすために神の世界（自然の摂理）をもっともうまく使わせてもらう、ここに建築の妙があるはずだ。神の摂理（自然）、人のしがらみ（社会や経済）という条件の中で、住み手にとっての最適解をコツコツと積み上げていく意外と地味な作業が、住宅を設計（つく）る建築家の仕事だったりするのである。

だから、設計の一番の基本の基本はやはり平面プランだ。いわゆる「間取り」である。素人でもかなり良くできた間取りを考える人はいる。安価な間取り作成ソフトなんかもあり、そんなので書いた図面をもって相談に来られると、「なんだか我々の立場がないなあ」と思うこともある。しかし、少々弁解しておくプロの仕事では平面プランと間取りは違う。

平面プランを作り始める時、ボクは（たぶん多くの建築家が）四角い部屋は書かない。方眼紙を使っている時でも、いきなり四角い部屋を書くことはない。敷地はしっかりと書いたうえに、乱雑な○をいくつも並べ始める。例えば玄関とか、水回りとか、家の要素をザックリと丸く書いて敷地の上に並べていく。小さい玄関なら小さい○、広いリビングなら大きな○。実際はそういう部屋名ではなく「くくをするところ」というイメージで書いていく。「入るところ」「火をたくところ」などなど。専門用語ではゾーニングというやりかたで、ほしい要素を敷地の中にどう置いていくかをまず考える。もちろん、例えば南側に高いビルが建っているとか、東側の道路は車でうるさいとか、西側には公園があるとか、実際の敷地条件をすべて頭に入れてゾーニングをすすめていく。

それがだいたい見当ついてきたら、徐々に四角の部屋に変換していく。図面の中の人になったつもりで歩き回り、動線や目線をチェックしながら、平面図に近づけていく。

そのために玄関または道路を画面の下におくようにする。図面のルールは「北が上」なのだが、この段階では入口が下で、下から上に進んでいくようにすると「中の人」になりやすい。「中」にはキッチンに立っている人もいるし、テレビの前に寝転がっている人もいる。そうした人たちが違和感を感じないような平面や高さの位置関係を、少しずつ調整しながら詰めていく。紙上ではうまくおさまっているようでも、実際に歩いてみると落ち着かない間取りというのによくあるもので、こんなことにならないようにするのがボクたちの仕事である。

平面プランを作っているときに、同時にやっていることは構造を含めた立体計画だ。どこにどう柱を立て梁でつなぎ壁を配置するか。無理なく2階を乗せることができるか。屋根（つまり雨水）はどう流すか。それらによって外観はどんな感じになっていくか。これはまだ紙上には現れていないけれども、頭の中ではほぼ同時並行で進んでいる。さらにこの段階で法規のチェックも必要になる。とくに都市部では高さや床面積が法律の規定ギリギリになることが多いので、平面プランの段階である程度チェックしながら進める必要がある。

いわゆる右脳と左脳で言うと、感覚的な右脳部分と、理屈や計算の左脳部分を同時に酷使しなくてはならないので、集中し始めると一心不乱になり時間を忘れる。音楽かけていてもいつの間にか終わっているし、プライベートな用事

はしばしば霞んで消えてしまいあとで怒られる。それぐらいこの作業は設計のクライマックスであり、どれだけやつても飽きるということがない。

「良い間取り」とは何か、これは愚問である。その家の条件によつて千差万別、どこにでも通用する良い間取りなんてない。「面白い間取り」ならあるかもしれないし、ちよつとした小技で参考になることも多い。だから、間取り集のような本も見ることはあつても読み飛ばして終わってしまうことが多い。そんな中でも興味深いのは、古民家などの伝統的な家の間取りだ。日本の家に限らず、世界の民家の間取りは見ていて楽しい。

気候、風土、手に入る材料、そうした条件に人の知恵が一ひねり加えられ、それが積み重なつてできてきた民家。住み手自ら作り上げたり、無名の職人の相伝であつたり、そこには「作品」のようなケレン味も、建売住宅のような投げやりな空気もまとっていない。それ以上でも以下でもない「家」として完結した民家はほど勉強になるものはない。ただ、今の社会に通用するかと言えばそれは別の話だ。社会のありかたが激変してしまつた以上、ノスタルジーや異国情緒だけで毎日を暮らすことはできない。現代を生きる住み手にとつての民家、それが理想なのだろうと思う。明月社の家は、とくに民家を標榜はしていない。おこがましいからだ。見せかけだけを古民家に似せて「民家」を

名乗る似せ（偽）民家で商売はしたくないし、得手勝手な解釈で「これが現代民家だ」と名乗るほど凶々しくもない。さらに深刻な理由もある。地域社会の中で作られ維持され再生されてきた時代の民家は、商品ではなかった。木材も竹も壁土も茅葺きも、すべて地域にあるものを使い、地域の住民の協働で建築された。これを現代の商品流通と労働力市場で賄おうとする、びつくりするほど高額になる。否が応でも、ほとんどのものが商品になつてしまつた今日、昔日と同じことを目指してもしよせん無理があるのだ。少なくとも、圧倒的多数の住み手が暮らしている都市部では通用しない。都市部に住み、毎日会社に通っているほとんどのこの国の人々にとつての民家。まだハッキリした姿は見つけられていないが、それが現代の民家であり、明月社の家が目指しているところだ。

と、かなり理想論に走つてしまつた。ひとり一人の住み手にとつては、そんな話よりも「どんな家にするの？」という話のほうが切実なのはまちがいない。ただそれでもボクは住み手に「どんな家がほしいですか」とは訊かない。はじめにも書いたけれども、形からは入らずに、「何をやるのか」から入つていく。生活パターン、大事にしている習慣、家ができたらやってみたいこと、子どもが自立したり老後になつたらやってみたいこと。もちろん住み手の中には、いくら尋ねてもなかなか答えが返つてこない人もい

る。「4LDKで子ども部屋は6畳で・・・」という話から一歩も進まない時もある。

そんな時は、ある程度プランを進めながら、でもいつでも一から変更するつもりで図面をはさんでしつこく尋ねると、ポロポロと毎朝の忙しい用意のこととか、趣味の話とか、話の端々に少しずつ挟まってでてくるようになる。そうやって、中に人を入れた状態でなければ、ボクはプランができない。いくら、適当にやってくれと言われても、ボクには作れないのである。もし明月社の家を建てよう、と奇特なことを思っただけの場合は、こういうマダルトコシイ話から始めなくてはならないと覚悟しておいていただきたい。

そんなインタビュアの段階の次は、いよいよプランを作っていく。先ほど書いたように、ゾーニングから始め、平面と構造と断面と法規チェックを同時に組み立てていく。この中身は、それこそ実在の住み手がないと具体的なことは書けないのだが、それでも特徴的なことはいくつか書き留めておきたい。

まず、住み手の家族の目線だ。部屋の形を捕らえているのは、五感のなかの視覚がほとんど。足や手で触ることよりも、まずは目線で壁や天井や窓を捕らえている。なので、例えば図面に12畳のリビングがあるとき、大事にことは12畳であることではなく「どう見えるか」である。もし

10畳であっても「広いな」「いいな」と感じればそれでいいし、14畳あっても「狭いな」「いやだな」と感じるならばNGだ。それは平面図を平面図のまま見ているから分らない。簡単なのは、スケール（巻き尺）を持って、座る場所から窓まで、とか、窓の大きさとかを目の前で実際に見てみるのだ。

ボクが平面プランを作って打合せに行く時は、5mのスケールは必携で、住み手に「ここからココぐらいですよ」「この部屋よりこのくらい広いです」「天井はここまで」と実際に見せるようにしている。もちろん、完璧ではないし実際にできた時とはかなり感覚は違うけれども、建築家でも工務店でもない人が平面図だけみて実際の広さを想像することは困難なので、これは必ずやったほうがいい。

また、窓の大きさも必ず確認する必要がある。例えば同じ一間幅の窓（実寸で約1.7m幅）でも、高さが1.8mのものとは2.2mのものでは、印象は全然違う。逆に、換気用の小窓は防犯上もあまり大きなものは使わないので、どれほど小さいかを見ておかないと、実物を見てから「えー」と驚くことにもなりかねない。窓については、部屋のどこについているかも重要だ。多くの場合、部屋は長方形でありその長い方の壁についているか、短い方の壁についているのか、でも感じる広さはかなり変わってくる。もちろん、普通は長い方の壁に大きな窓がついていれば、部屋は実際よりもそうとう広く感じるし、短い方についていれ

ばトンネルのような面白味が出ることもある。

概ね大きな窓は部屋を広く見せるけれども、大きければ良いというものでもない。外を歩く人やお隣さんと視線がぶつかってしまったては落ち着かないからだ。道路に面している時は、あえて小窓をたくさんにしたり、高窓（背丈より上の方につける）にしたりという工夫が必要だ。

住み手の視線で注意したいのは、家族間の目の高さだ。キッチンに立っている人、テーブルに座っている人、テレビを見ている人、などの目の高さが極端にちがうと、落ち着かない空間になる。視線のことだけを気にするならば、キッチンの床はダイニングよりも15センチ低くして、床に座ってテレビを見たりする場所はダイニングより40センチほど高くするのが理想的だ。要望もあってそのように設計した家もある。ご想像の通り、キッチンの床を下げるのは家事動線としては厳しいものがある。一番頻繁に行き来する場所に段差があるのは、足腰の鍛錬にはなるけれども、食器や鍋をもって移動することを考えるとあまりお勧めはしない。

畳コーナーを3×40センチ高くするのはよくやっている。下に抽斗を作ったり、中には畳がガーツと開いて下に布団が収納できる、なんていう仕掛けをつくったこともある。自動車のトランクのようにバネがついているので、意外と楽に開いたように思う。高床式はゴロゴロしていても

視線が低くならず、寝転んでも踏まれる心配もなく、遊びに来た時に臨時の客間になったりもする。その3畳がご主人専用の居場所という家もあった。もちろんケースバイケースだが、かなり重宝する小技だと思う。

もうひとつ視線で問題になるのが吹き抜け。実感としては吹抜のある部屋はかなり広く感じる。これまでの経験では、空間的に作って失敗したと思つたことはない。これをご想像の通り、吹抜で問題になるのは暖房である。暖かい空気は上へ上へと上がってしまうので、足下はどうしても寒くなってしまう。したがって、吹抜の部屋にはほぼセツトで床暖房が必要になってくる。そのコストをOKとするならば吹抜は考えてみてもいいと思う。ただ、無闇やたらと高い吹抜はかえって「穴の底」になることもある。部屋の長い辺の長さよりは低い範囲が妥当なところか。もつともこれは個人差があるので、穴の底が好きな人もいれば、ボクなんぞは個人的には体育館のような全面吹抜の家がいて密かに思っていたりして、最終的には「お好みで」ということになる。

いずれにしても、平面プランを考える時には〇〇畳という数字や吹抜という形状にとらわれず、自分の視線がどのように届くのか、届かないのか、それをできるかぎりシミュレーションしてみることが大事なのだと言うことを憶えておいていただきたい。

■現場を知りたい

職業右翼のお兄さんや宗教法人ブローカーの入り乱れる世界から逃げ出したボクは、建築設計という世界に疑問を持ち始めていた。普通の設計事務所はほとんどん仕事がなくたっていき、かなり無理無体を通す事務所だけが忙しい。これはもう、設計事務所という業態には未来はないのではないか。少なくとも、設計事務所にこだわっていると、ウロウロしているうちに40歳になってしまいうさだ。それに、マンションなどの大きな建築物は、ボクの性にあってこないようだ。自分の手の内におさまらない規模の建築は、出来上がってもイマイチ感動がない。もっと「自分の手作り」に近い仕事がしたい。

そんなことを考えた挙げ句、当時住んでいた場所にほど近い、小さな工務店に就職した。そこは主に店舗を手がけており、夜は設計、昼は現場監督というこれまでとは違って変わった生活が始まった。働いてみて知ったのは、店舗屋さんと住宅屋さんは完全に棲み分けているということ。店舗建築をやる工務店は住宅はほとんどやらないし、住宅を建てる工務店は店舗には手を出さない。やってみて驚いたが、発想も施工方法も材料も店舗と住宅ではかなり違う。住宅は50年とか100年という長さで考えるけれども、店舗は3〜5年、長くても10年もてばいいという。パチンコ屋さんの内装がほとんど両面テープで貼り付けてあつ

たのには、本当に驚愕した。

工期も住宅は4ヶ月前後だけれども、店舗は1ヶ月もかけることは珍しい。必要となれば24時間体制で突貫工事を進める。ボクが担当した物件でも、40坪ほどの木造一戸建ての店舗を1ヶ月で建ててしまったことがある。一つの部屋の中間の高さに足場を作って、上と下で別の職人を入れたり、ペンキ屋さんは夜10時に出勤して朝まで塗ったり、今思い出すと信じられないことをやっていた。そのぶん短期に売り上げがあがるので、社員はしんどいけれど会社としては旨みもある。

デザインの考え方も住宅とはまったく違う。これまで書いてきたような考えは通用しない。平たく言えば「目立ってナンボ」の世界だ。主役は建築家でも商店主でもなく、その店に来るお客さんだから、必然性があるうがなからうが客の目を納得させる意匠は必要になる。毎日目にする住宅の住み手と違って客の目は一瞬だ。その客が1分とか1時間の間に満足するデザインという、これまでとは全然違うものに取り組んだ。

店舗建築については、家の近くの工務店と、より面白そうなお仕事をもとめて移った京都の繁華街にあるデザイン事務所と、あわせて5年間くらい仕事をした。住宅も何軒かはあったが、そこでもカルチャーショックを味わった。平面プランを作る前に、外観デザインを作れというのだ。これまで書いてきたようにボクはまず平面プランから始めて、

それに並行して徐々に外観を整えていくというやり方をやってきた。ところが、間取りなどにもない状態で、道路から見た家の外観をデザインしろというのだから訳が分からなかった。もちろん今はそんなやり方はしていないが、1軒だけそのやり方で建てた家がある。もちろん、住み手もそれを希望していたからだ。 (その家が、後日ボクをまったく違う方向に導くキツカケになるのだから不思議なものだ。)

そんな設計の仕方の是非はともかく、デザインというものをハッキリと意識させてくれる経験になったのは確かだった。デザインという言葉も日本語化する際にどうやらかなり意味を狭くしてしまったようだ。そもそも「設計」は英訳すれば Design なわけで、企画からプランから外観の見た目まで、すべてがデザインだ。しかし、日本でデザインというとほぼ「見た目」の部分を指していて、本来はデザインというよりもデコレーションというべきなのかもしれない。というような理屈はちよつとおいとして、ここではデザインといえば狭義のデザインのことにしておこう。

店舗の仕事をすることでこの狭義のデザインに正面から取り組むことができたのは、今から思うと貴重な経験だった。住宅の場合は店舗デザインのようなアプローチはしなければいけども、それでもやはりデザインは単なる結果論、な

りゆき任せというわけにはいかない。毎日毎日視野に入っても自分のいいデザインは、情性だけではできないからだ。

デザインについては文字であれこれ書くのはかなり難しい。それでも言うことがいくつあるもので、参考までに書き留めておく。よく言われるのは「3色以上使わない方がいい」ということ。ボクは少しアレンジして「1シーンに3色以上使わない方がいい」と思っている。これは無難に正しいとおもう。何かを目立たせたいときも、逆に何も目立たせたくない時も、3色までにしておくのは正解だ。

1シーンというのは、ある生活パターンの視界という意味で、必ずしも一部屋の中という意味ではない。ふた部屋続きで使うことが多ければふた部屋分だし、対面キッチンに立ってリビングを見ている状態のように、ひと部屋の中でもある方向を向いている場合は部屋の一部ということになる。

近似色には要注意だ。おおざっぱに言えばどれも「白」になるような色でも、薄いグレーと薄いベージュとか、薄いブルーと薄い黄色など、違う系統の色が並ぶとたいがい違和感を感じるので、慎重に避けるようにしたほうがいい。できれば家具までふくめて、こうした色のコントロールができる。「ああデザインされているな」と感じられるようになる。

色の取り合わせにも、合う合わないがある。いろいろ理屈もあるようだが、ボクがやっている一番簡単なやり方は

「薄目で見る」ことだ。店舗デザインを始めたころに一番悩んだのがこの色の取り合わせだった。なにせ原色や黒などもふくめて、これまで使ったことのなかったような色をどンドン使わなくてはならない。最初は判断できずにオロオロと試行錯誤をしているときに、ふと目が疲れてきて眼鏡をはずした。すると、不思議や不思議 これとこれがいいと「ピン」ときたのである。どうやら「色以外のものを見ない」ということがポイントらしいと気が付いた。ハッキリ見ていると、色も見えているけれども色サンプルの材質や模様などもどうしても目から脳に入ってしまう。その雑音を消してやると、「ピン」とくるのだ。いちいち眼鏡をはずすのも面倒なので、普段は薄目で見るようにしている。

色を見る時は当然ながら光に気をつけなくてはならない。とくにショールームなどでキッチンなどを見る時、そこに点いている照明の色を覚えておかないと実際に家に設置した時はかなり印象が変わることがある。ショールームのライティングは、実際以上に豪華に見せようと仕掛けられている。そこまで意図的でなくとも、照明の光と自然光、照明の電球色と昼白色でもぜんぜん色が変わる。持ち歩けるサンプルがあれば、窓から入る自然光で見えるようにしたほうがいい。

外壁に使う材料は、もっと激しく光の影響を受ける。日向と日陰、太陽の高さや角度によって、見え方はまったく変わる。外壁材については、棟上げをしたタイミングで現

場にサンプルを用意してもらい、実際の角度に置いてみて検討すべきだ。よくあるサイディングの場合はさほどの違いはないかもしれないが、塗り壁の場合は凹凸が大きいので変化も大きい。明月社の家で一番よく使う「白州そとん壁」という材料は、塗り壁の中でも陰影が強くなるので、何色か用意して必ず現場での確認を行うようにしている。

窓サツシも外壁では目立つ要因だ。最近は多くの家で「シヤイングレー」（メーカーによって名称は違う）といううなや茶系のシルバーが使われている。茶色はちと時代遅れ風だし、黒は目立ちすぎるし、白は安っぽくなるし、白っぽいシルバーは好き嫌いがあるので、どうしても無難なシヤイングレーが多くなる。明月社の家でもシルバー対シヤイングレーが1：2くらいでやはりシヤイングレーが多い。気をつけたいのは、このシヤイングレーは光の当たり方で玉虫色のように見え方が変わるとのことだ。正面から太陽が当たるとシルバー、薄明かりだとベージュ、日陰になるとグレー。これもサンプル板で確認しておいたほうがいい。

家の形によつては屋根も色が目立つ場所である。何色がいいかは家によつて変わるので、これは一概に言えない。屋根の色を見る時の注意点は、光を反射させて見るとのこと。普通に見るよりかなり明るく見えるはずだ。屋根の選定の仕方については、また項を改めて書くことにする。なお、色とはちよつと違うけれども、本物の木の隣にプ

リントの木目なんていうのは、絶対にやめてほしい。最近の木目プリントはすぐ進化しているので、正直ボクも間違えることがある。でも、隣に本物があるとさすがにその違いはハッキリしている。プリントの偽物さが際立ってしまふ。ご予算の関係で木目プリントを使う場合は、近くに本物を使わないとか、焦げ茶のプリントにして木目を目立たせないとかの配慮が必要だ。

明月社の家は木の家なので、やはり本物の木をどうやって見せるかはデザイン上の重要なポイントになる。まず木を見せるといふと真壁にするかどうか問題になる。真壁というのは柱の表面を部屋の中に見せている状態で、柱は壁面よりも1.5センチほど飛び出している。和室はだいたいこのタイプ。これに対して、柱の外側（部屋内側）に石膏ボードをバースと全面貼りしてしまうのが大壁。これだと柱は壁の中に入ってしまうので見えなくなり、壁面は真っ平。最近の家はほとんどがこの作り方だ。

木の家を名乗る以上、真壁を採用するのが本筋なんだけれど、明月社の家では和室以外はほぼ大壁にしている。理由は使いやすさとコストにある。真壁は壁面から柱が飛び出しているの、家具を置いたりするのに何かと不便である。デザイン的にも柱のピッチに家具の大きさや置き場所をあわせてやらないと不格好になってしまい制約が大きい。壁に凹凸があるので掃除もちょっと面倒。しかも、柱を一

本一本見せるには材料代も大工の手間もかかるのでコストアップになってしまふ。そんなわけで、全ての部屋を真壁にすることはしていない。

その代わりに、大きな梁を見せるようにしている。梁は柱と柱の間に掛け渡して上の階の床を支えているので、幅が12センチ高さは30センチを超えてかなり見応えのある大きな材料になる。これが3尺とか1m間隔でリビングの天井にずらっと並んで見えるのが、明月社の家の特徴とも言える。実はキレイに並べるのは構造的に難しい時もあるのだけれども、自分で構造計画もやっているのだからクリアしている。

視界に一番入ってくるのは壁だから、木の家である以上壁は木を貼るべきではないか。ボクも最初はそう思っただけで、壁中に木を貼ったこともあった。これでOKの場合もたしかにあるが、どうしても山小屋風になってしまうのは避けられない。その風情があう家もあればあわない家もある。全部屋に貼ろうとするとコストの問題もある。いくら節りの木でも貼るための大工手間はかかる。ひとつのお勧めは、部屋の四方に貼るのではなくて一面だけ木の壁にするという方法。壁自体をデザインにすることもできる。また、板を縦に貼るのもいい。横に貼るよりひと手間余計にかかるとは思いますが、引き締まった印象になるので玄関や勉強部屋などにむいていると思う。

明月社の家の床は基本的に杉の無垢板を使っている。必

要や要望があれば他のものを使うこともあるけれども、とくになければオール杉の木。機能的な面は後のほうで書くので、ここでは省略。せっかく床を無垢の木にしたら忘れちゃいけないのが幅木。幅木というのは壁の一番下の床に接している部分。たいていは高さ6cmの木目のものが貼ってあるはずだ。ビルなんかだとビニールのこともある。ここを床に合わせて本物を使っておかないと、ものすごく違和感が出てしまう。というか床の無垢材がだいなしだ。ぜひ気をつけていただきたい。ちなみに明月社の家では幅木は6cmではなく4・5cmだ。ケチっているのではなくてこのちよつとした違いが空間を引き締めるから。幅木がない空間もきれいだけれども掃除機のヘッドが当たる部分なので無しにするのはお勧めしない。

ひとくちに「木」と言ってもデザイン的には多種多様、樹種も多いし同じ樹種でも見え方が違うし色をつけるかどうかもある。樹種については圧倒的に「杉推し」である。日本の山にたくさんあって値段も安いということもあるけれども、なんといいっても見ても触っても優しいからだ。新築の時はまだ色が若くて落ち着かないけれども、数年たつて日に焼けると実にいい感じになる。

杉に限らずどんな木でも、製材の仕方によって柾目と板目というものがある。まっすぐにほぼ平行の木目が並ぶのが柾目。ウネウネとしたいわゆる木目っぽいのが板目。1

本の丸太から柾目のほうがちよつとしか取れないので高級ということになっている。実際に壁や天井に使ってみたこともあるけれどもかえって良くできたプリントのように見えたりして面白みに欠ける気がする。いかにも木らしさを感じるのは板目のほうだ。

柾目でも板目でも、節のある材とない材がある。もちろん節がない材は長年よく手入れされてきた樹の丸太からしか取れないし、その丸太の中でも割合は少しだから値段は高い。つまり柾目の無節は最高級で板目の節ありが一番安い。必然的に節あり板目を多用することになる。節については好き嫌いがかなりあるようだ。節がある方が木らしくて好きという人もいれば、目に見つめられているみたいで怖いという人もいる。ボクも実はやたらと節が多いのは好きではない。1枚(3×4m)の板に小さめの節が2個くらいだとちよつどいい塩梅だ。値段も無節ほどは高くない。このくらいの程度を上小節(じょうこぶし)略して上小(じょうこ)というので憶えておくと便利。「床は上小でお願いします」なんて言うのと「このお客さんはよく知ってるな」と一目置かれる、はずだ。

木に色を付けることもよくある。古民家のような焦げ茶色にしたり、少しだけ汚れを目立たなくするように薄い目の茶色にしたり、変わったところでは木目を残した白なんというものもある。これはペンキを塗るのではない。ペンキというのは表面にしっかりと膜を作って下地の木を見せ

なくしてしまふので、木の家では基本的に使わない。使うのは木材保護塗料というもの。保護塗料は木の表面に膜を作らないので色はついても木肌は感じられ、もちろん木目は見える。テッカテカの艶も出ないし、触っても木の感じのままである。

明月社の家でよく使っているのは、色無し（クリアー）の場合はノンシツクス、茶系にする場合は柿渋コートGというもの。どちらも柿渋メーカーのトミヤマの製品だ。クリアー塗料を塗ると無色といいながらも実際は木肌は飴色で木目がクッキリして水に濡らしたような色になることが多い。このノンシツクスはほとんど濡れ色になることがなく、塗った後もあまり変化がないので気に入っている。柿渋コートGは柿色、古代色、黒色の3色しかないけれども、どれも発色がいいのと施工しやすいうえにお値段も高いので、色の好みが合えばたいいていこれを使っている。ただし両方とも柿渋ではないし天然由来でもなく、珪酸（ガラスの原料）とシリコーン樹脂などが原料である。いずれも揮発性もなく口に入れても毒性はないので（食べたくはないが）問題なしと判断している。

ペンキのように調色するのは難しいので色の選択肢は少ないだけに色の取り合わせで悩むこともあまりないけれども、とにかく木目をきれいに残して艶を出さないことが、木を塗装する時のデザイン上のキモである。いくら無垢の木でもウレタン塗装とかWPC加工などは、原材料は木で

あつてももはや木ではなく、光を反射し手足に触れるのはウレタン樹脂だ。

余談だが、最近のよくできた木目シートの木目は職人の手書きだそう。本物の銘木を見ながら人の手で原画を描いているらしい。これをスーパーリアルな芸術作品と見るのか、ただの偽物と見るのか・・・。その手の製品を目の前にすると、職人さんには申し訳ないがやはり芸術作品には見えないのだが。

艶を出さないというのは木の塗装に限った話ではなく、家の内外で万事に通じる原則ともいえる。水道の蛇口と便器以外、というか水回りでやむを得ないところ以外は、基本的に艶無しにしたい。家の中のテカテカの代表はビニールクロスだ。塩ビという材料もよろしくないけれども、明月社の家でビニールクロスをはほぼ使わない理由はその艶感にある。ビニールクロスを貼ると一気に壁や天井が迫ってきて部屋が狭く感じる。では何を主に使うのかというと和紙を使っている。洗面所や収納などはビニールクロスを使うこともあるので比べてみるとその違いがよく分かる。今ボクが座っている事務所の壁も、左側は和紙で右側の本棚の後ろはビニールクロスなので、首を左右に回すと実感できる。（壁の材料の話はまた後の項で）

と、先ほどから目の仇にしている艶というのはそんなに悪いものなのだろうか。艶の名誉のために少し考えておき

たい。辞書をひくと「物の表面から出るしつとりとした光」(デジタル大辞泉)などと書いてある。艶っぽいといえど女性に対するかなりの褒め言葉だし、読み方は違うけれど艶(えん)については「日本文学における美意識の一つ」(ブリタニカ国際大百科事典)とまで書いてあるし、本当に艶を敵にまわしても大丈夫なんだろうか。

艶のある日本の美といえれば代表格は漆器だろうか。幾重にも塗り重ねた漆は黒であれ朱であれツヤツヤである。黒は酸化鉄で朱は顔料だそう。いずれにしても顔が映るくらい艶がある。この艶と、ビニールクロスやペンキの艶とは何が違うのだろうか。おそらくは厚さと粒そろいだらうと思われる。漆は半透明な樹脂を何層にも塗り込むので、膜厚の表面から記事に近い層までがすべて反射することによって、重合した反射光になるだろう。また反射する樹脂の細胞も、天然故に大きさが揃いになり反射角は微妙に乱反射している。そこが合成樹脂とは違う艶になる所以ではないかと想像している。対するにビニールクロスやペンキの反射は画一的で表面だけの反射光になり、艶っぽいどころかテッカテカになってしまうのだろう。(文献を見つけれなかったもので、ここは推測と想像)

ただいかに漆の艶であっても、艶は一種の緊張感を生み出す。磨いた大理石もそうだしガラス張りのビルもそう。ビニールやペンキのような安っぽい感じはないけれども、やはり空間に緊張感を作り出す。休息と再生を第一に考えてい

る明月社の家には、やはり艶は似合わないと思っ

■木に出会う

店舗デザインの数期間はなかなか充実していた。

京都の会社に行った最初の年は、待ちに待った一級建築士の試験の受験資格の得られる年だった。毎日夜8時には仕事を終わらせてもらって近くの喫茶店に飛び込み、カレーとコーヒーを頼みウォークマンで雑音を塞いでみっちり2時間勉強。こんな生活をつづけたお陰でなんとか試験に合格できた。この半年の間、日曜以外は毎日毎日カレーを食いつづけた。参考書から目を離さずに食えるので都合が良かった。これから資格試験にチャレンジする方はご参考にどうぞ。

資格をとってからは徹夜になることも少なくなかったが、なにせ会社が木屋町や先斗町にほど近いため駅まで直行で帰るのは困難を極め、こんどは同僚と居酒屋に毎日毎日通うことになる。またこの時期には私的なパートナーにも出会い、所帯をかまえることもできた。そんな日々を送っていた頃、珍しく住宅の仕事が入ってきた。わざわざ店舗デザインに依頼するだけあって、そのお客さんの第一声は「変わった家つくってや！」だった。

その頃にはいきなりデザインから入るやり方にも慣れていたので、最初に正面から家を見たスケッチを2案用意し

て持つて行った。これは家か？というような奇抜なものと、真ん中に外階段が貫く少しおとなしいものと。ボクは外階段プランが気に入っていたのだが、お客さんに見せたところ案の定、これは家か？に即決。ホントにこれを建てるのか、とボクも驚きつつ、書いてしまったスケッチを現実の物にするために脂汗を流した。

ちようどその作業をかかっているころ、朝のニュースで奈良県を襲った台風7号（1998年）の話をしていた。室生寺の五重塔に巨木が倒れかかりボロボロになったのを覚えていた方も多いかと思う。日本の林業発祥の地とも言われる奈良県吉野地方でも大量の木が風で倒れ、林業が大打撃を受けた。風で倒れた木は製材してみると中で繊維が切れていることがあり、丸太の状態では問題なくても出荷することができない。

そこで、吉野地方のとある森林組合が自分たちで製材をして一本一本チェックした木を売り出した。それが、朝のNHKニュースで流れていたのだ。ボクは「変わった家はこういう変わった木で建てたらおもしろいんじゃないか」というまったくの興味本位でそのニュースに食いつきお客さんに提案してみたところ、これまた案の定即決。数日後にはお客さんとともに吉野に向かって出発した。

その森林組合では、製材の様子を見せてもらうだけでなく、倒れた山を案内してもらい斜面一面がなぎ倒された光景に言葉を失った。（ついでに柿の葉寿司の工場まで見せ

てもらった） やや興奮気味に森林組合の事務所に戻り、さて実務的な打合せをといたときに奥の部屋からかなりお年を召した組合長が出てこられた。そしていきなり言われたのが「なんでおまえらに売らなアカンねん」だった。吉野林業の過去の栄光を垣間見た瞬間だった。

日本の林業には輝かしい黄金期がある。1960年代前半から1970年代にかけて、国産の木材は飛ぶように売れた。出荷量は現在の3倍以上。当然値段も高く、物価を勘案すると2倍以上の価格で売っていた。つまり、今の6倍以上儲かっていたわけだ。しかしウハウハの極みにあつた1980年から出荷量が急激に減り始める。戦災復興↓高度経済成長↓持ち家政策という一連の住宅景気が一段落したところに、第2次オイルショックだった。さらに1990年代のバブル崩壊後には出荷量のみならず価格も下がっていった。こうして濡れ手に粟の日本林業は、補助金でかろうじて命脈を保つ絶滅危惧産業になってしまった。

木材の価格だけ見れば1980年までの価格は明らかに高すぎたのであり、濡れ手に粟をキツパリ諦めて適正な利益を生み出す程度に修正すべきだった。そうすれば輸入材にここまでシェアを奪われることもなかったし、少々不況はあっても絶滅危惧されるところまで落ち込むことはなかったはずだ。

さらに困ったのは、使える木を切り尽くしてしまったこ

とだ。戦争中、お寺の鐘までが武器を作るために供出されたことは有名だが、木材も同様に日本木材統制株式会社という国策会社によって軍需用に乱伐され言い値で供出させられた。戦争に負けると今度は焼き尽くされた住宅の復興が始まった。敗戦直後は全世帯数の1/4にあたる420万戸の住宅が足りなかったというから、木材は伐れば伐つただけ高値で売れた。こうしてただでさえ荒廃した日本の山を、戦後は莫大な復興需要のために後先を考えず伐つて伐つて伐りまくった。

もちろん拡大造林の号令をかけて植林に励みはした。なんと15年間で400万ヘクタールに杉や松を植えてしまった。400万ヘクタールというのはなんと日本の陸地面積の1割以上で、現在の日本中の宅地面積の2倍以上だ。恐るべし。しかし、当たり前だが植えた木は何十年かたたなければ商品にはならない。泥棒を捕まえてから縄をなうどころか、縄の原料になる麻の種まきをするようなものだ。これだけの植林となると林業家ではない人たちも木材バブルに浮かされて里山の広葉樹を切り捨て、田んぼや畑にまで杉松を植えた。本当は杉には適さない山にもどんどん植林した。

低い山の南斜面に杉を植えると、目の詰まった良材はとれずに花をいっばいつけて花粉を大量生産すると林業家に聞いたことがある。ご想像の通り、毎年春の花粉症はこの拡大造林運動の結果である。

こうして需要の側からも供給の側からも木材バブルは幕引きとなったのだが、日本林業の基本路線はいつまで経つても「いつかまた値が上がる」「値を上げるためにもっと使え」だった。ボクは吉野の台風被害の木を使ってから、林業についての本を買い込んで読んでみた。そのほとんどが現状を嘆くばかりで、口を揃えて「日本の山は困っている」「国産材は安い輸入材に負けた」「日本の環境を守るためにもっと日本の木を使え」だった。最初は「大変だなあ」と同情していたのだが、何冊読んでも嘆き節なのに、ややうんざりしてきた。冷静な分析や、経営的な将来計画について書いてあったのは、当時読んだ中では唯一「イギリス人が見た日本の林業の将来」という本だけだった。おいおい日本人、自分で考えようぜ、と暗澹たる気分になった。

それでも、明月社の家は国産材を使っている。産地は土佐嶺北、土佐梶原、吉野天川、十津川、球磨とその時々縁でいろいろ替わってきたが、日本の山の木で建てるということは一貫してやってきた。しかも、いずれもその産地を自分の目で見てある程度その産地の事情を理解し、可能ならば住み手も産地まで同行して自分の住む家の木の一本くらいは自分で伐るようになってきた。

なぜ日本の木にこだわってきたのか。論理的に説明しろと言われてもちよっと難しい。理屈抜きの感情のほうが大

きいからだ。自分たちの何代か前の世代の人たちが植えまくってしまった木材バブルのせいでも、やっと思いついた山に放置されている杉や松たちが気になって仕方ないのだ。伐つて使うのは人間の都合だから、そのまま放置しておけばいいという話は残念ながら通用しない。そもそも使うために植林した木たちだから、放置してもマトモに育たない。畑の野菜が間引きしないとヒョロヒョロになると同じで、過密に植林された杉や松は放置すると異常に細長くなり、枝と枝が重なって地面には日光が届かない。草も育たず土は流れて根がむき出しになり、そこに台風や大雨がくるとまとめて倒れたり土砂崩れを起こしたりする。林業用に植林された山は、放置してもそう簡単に自然に戻りはしない。

バブルに浮かれて伐りすぎて植えすぎた責任はボクにはないし、もちろん住み手にもない。同時に、植えられた木たちにも責任はない。けど、山に行つて、使い頃の木たちが切り捨てられて腐っていく姿や、間伐もされずに口ウソク林（異常に細く密集した状態）になってしまった姿を見ると、たまらない気持ちになる。もったいないどころか、植林地の中心でバカと叫びたくなる。ボクたちの住まいからほんの半日の距離にこうした木々がそれこそ山のように生えている。これはもう どうしたって使わずにいらなくなるのだ。

それと、国産材は「気持ちがいい」。国産の杉や松は輸

入材のベイマツやベイツガや福州杉なんかと比べると、見た目も匂いも格段に気分がいい。別に国粋主義でもなければ輸入物を差別しているのでもなくて、感覚的に気持ちがいいというのは、ボクだけじゃないと思う。やっぱり同じような風土で育ってきたせいなんだろうなあ。

とはいえ、いくら植えた木がもつた言いからと言っても、それが建材として劣つたものなんだたら感情論で使うべきじゃあない。国産材は建材としての性能は劣つていいのか？ちゃんとかくにんしなくては。結論を先に言ってしまうえば、劣つてはいない。輸入木材と比べると一長一短、というのが公平なところ。で、「短」の部分は十分に穴埋めできる。

よく使われる国産材にはスギ、ヒノキ、カラマツという3種類の木がある。他のもあるけど、この3種類で8割近い。なかでも圧倒的なのはスギで、スギだけで国産材のシェアは50%超。もう日本中スギだらけと言つてもいいくらい。なので、国産材代表ということでスギ（杉）について考えてみる。杉の建材としての短所は何かというと、なんと言つても柔らかいということ。「家を作るのに柔らかいなんて致命的じゃないか」って？ いやいや、そこまで柔らかくはない。どのくらい堅いか（厳密に言うとなんか「たわみにくさ」）を示すヤング係数という指標がある。輸入材の代表選手であるベイマツ（米松）と比べると、米松：杉

110：7くらいなので、杉のほうが3割ほどたわみやすい。あらら3割も弱いじゃん！

ところが、「たわみ」は材をちよつとだけ大きくすれば3割くらい簡単に挽回できちゃう。おつりがくるほどのなご安心を。しかも、最近はそのヤング係数を一本一本計測してラベル貼つてある杉やヒノキもあるので、なんの心配もない。こういう性能を計測された木のことをグレーディング材というので、憶えておくとカッコイイ。

国産材を使うにはもう一つ大きな問題がある。これはボクもこの業界に入つてみて驚いたんだけど、木はあるけど木が無いということが。。。「〇〇県産材を使つてくれ」と盛んに言うので、「ほな下さい」と注文すると「ない」と言う返事がくる。。こんなバカなことが実際にあったりする。山には木は山ほどあるけど、一軒分そろえて家を建てる現場に持つて行くことができない。産地をきつちり特定できる国産材で、一軒分を揃えることができる製材所や森林組合はそんなに多くないというのが実情なのだ。だから、「〇〇産の木で家を建てたい」と思つても、そういう数少ない製材所なんかを見つけ出さないとならない。こりゃたいへんだ。

この問題を解くには、二つの答えがある。一つは、細かい産地にこだわらずに国産ならよしとする方法。これだつたら、どこの工務店から注文しても手に入る。(ただし、

グレーディング材が入るかどうかは微妙。) なんて産地が分からないのに国産だと判断できるのかというと、見た目も香りも輸入材は違うから。例えば中国産のスギも流通してるけど一目でそれとわかっちゃう。最近のカリフォルニア米はジャポニカ米に近づけるために改良を重ねてるから食べても分からないらしいけど、輸入のスギはそんな改良してないからすぐ分かる。

もう一つの答えは、インターネット。インターネットで国産材にこだわっている設計事務所や工務店を探してみる。だいたいこういう会社はインターネットで集客してるので、たくさんヒットするはず。看板倒れのところから、気合の入つたところまで玉石混淆だけ。ボクの経験値では、国産材とか自然素材とかエコとかの味付けの濃いところは、すごく良いか結構ヒドいかの両極端なような気がする。しっかり選んでいただきたい。もちろん、不安な方はボクにご連絡いただければいいじゃないかなあ、としつかり宣伝もしておく。

ウチでもヨソでもいいけど、首尾良く国産材を使えることになつたとしよう。次はどうするかだ。「産地はどこでも国産材」の場合は無理だけど、産地を特定できる場合はその産地まで出かけることを超お勧めしたい。ボクもこの十数年間でかなりの数のお客さんと山に出かけたけれど、すごく喜んでくれるか、さもなければウルトラ喜んでくれ

るか。とにかく、口では説明できないものがある。

ときには12月だというのに標高1000mを超えるような場所での伐採祈願祭となり、しかも途中から大雪が吹雪いてきて遭難するかと思ったこともある。(車で行っているのに遭難はしないけど、超絶寒かった。)まあこんなのも、かなり強烈な思い出になる。

早いものでも40年くらい、古ければ100年を超える木を使う。100年前の1916年、大正5年と言えば第一次大戦の真っただ中、日本では大正デモクラシー全盛で夏目漱石が49歳で亡くなった年。こんな時代から延々と育ってきた木を使って家を建てるんだと思っただけでも感慨ひとしおになる。そして、その木を育んできた山に知らんぷりはできない、アリガトサンのひとことを言いたくなるのが、同じ生き物としての感情なんじゃなかるうか。

■いよいよ山に深入りする

ここからボクの建築遍歴は佳境(?)に入るのだが、ぼちぼち続きを書いているので、こうご期待。もし、早いこと教えてや という方がおられたら直接ご連絡ください。お茶でも飲みながら(お酒ならなお良し)、お話ししましょう。

とりあえず、今日はここまで。